

研究発表もうしこみフォーム

氏名：谷川春菜

氏名のローマ字表記：Tanikawa Haruna

所属：早稲田大学大学院博士後期課程

専門分野：歴史学

発表のタイトル：

清朝統治下ハルハ＝モンゴルの貨幣—18世紀末フレーにおける銀と茶—

発表要旨（600字～800字程度）：

17世紀末から20世紀初頭にかけて清朝の統治下にあったハルハ＝モンゴル地域(以下ハルハ)では、茶、布、毛皮、羊、中国内地から流入した銀などが貨幣として使用されていた。なかでも銀は茶など他の品物に比べ、少量でも価値が高いため持ち運びやすく、経年劣化しにくく、切断して少額にくずして使用することもできる便利な貨幣であった。それではなぜ、茶などは銀に淘汰されることなく、貨幣として使用され続けたのだろうか。従来その理由は、ハルハに流入する銀の少なさにあったと考えられてきた。¹

しかし、モンゴル国立中央文書館に所蔵されている、18世紀末のフレー（現ウランバートル市の前身）においてモンゴル人官員らが作成した帳簿群²からは、彼らは経費を銀の形で受け取っていたにもかかわらず、業務遂行に必要な物資を購入する際には、茶に両替してから使用していたことが読み取れる。このことから、貨幣が銀に統一されなかった理由は、銀流入量の少なさというより、銀を使って購入することの困難さにあったのではないかと推論される。

以上の推論をふまえて、既述の帳簿群を詳しく分析したところ、以下の内容が明らかになった。品位の異なる複数の種類の銀が併存していたため、両替のたびに品位を見極め、対応する秤で量る必要があった。また銀は切断するとそのたびに目減りした。対して茶は同品質、同重量で規格化されており、使用の際に品質や重量を確かめる必要がなく、個数を数えるだけでよかった。また1個当たりの価値が低く、低額取引でも切断する必要がないので、目減りもなかった。以上から、銀よりも茶のほうが購入の手段として適していたと言えよう。

今後の課題として、こうした銀使用の困難さにどの程度普遍性があるのか、18世紀末フレー以外の時期や地域を対象を広げて検討する必要がある。

¹ А. Очир (1995) Монгол-Хятадын худалдааны харилцаа: XIX-XX зууны эхэн. УБ. 97-99 ページなど

² M10-1-592、M9-1-373 など